

利尻山登山道の地質調査及び整備検討について

利尻山（標高 1,721m）には、深田久弥の選んだ日本百名山の一つということもあり、毎年多くの登山者が訪れる。しかし、近年登山道の侵食が進み、流出土砂による植生損傷、崖崩れによる登山者への危険性等が大きな課題となっている。このため、環境省では平成 17 年度より山頂付近及び親不知子不知の 2ヶ所の地質調査を行うとともに、登山利用のあり方や登山道整備の手法について、地元関係者を交えて検討をはじめている。

1. 登山道の現況

(1) 概況

利尻山の登山道は、鴛泊（利尻富士町）から登るルートと杓形（利尻町）から登るルートの 2 本で、両ルートは山頂から約 300m 手前で合流する。元々火山性堆積物に覆われた崩れやすい地質のため、鬼脇からの登山ルートは山体の崩壊により昭和 61 年に通行が禁止された。登山者が到達できる山頂も、最高点への道が崩落したため 1,719m 地点となっている。

現在、登山道沿いで最も侵食が進んでいるのは、両ルートの合流点から山頂方向へ向かう位置と杓形ルート途中にある親不知子不知の 2ヶ所である。

(2) 利用状況

登山者のほとんどは 6 月下旬から 8 月中旬の 2ヶ月間に集中して訪れ、平成 16 年度の推定利用者数は約 11 千人、その約 9 割は鴛泊ルートを利用している。登山者数は、センサーを用いて平成 14 年度から計測しており、15 年度以降は減少傾向にある。

(3) 荒廃の原因とその影響

登山道の侵食が進む要因としては、登山道が雪解け水や降雨水を集めて水路化すること、短期間に登山者が集中するため路面の踏圧・崩れが起りやすくなること、の 2つが考えられ、硬質な堆積物が剥離されて脆弱なスコリア層が露出した箇所では特に侵食が顕著になっている。

山頂付近では、削られた土砂が不安定な状態で堆積し、転倒等による登山者の事故が発生しているほか、植生域に土砂の堆積が広がり植生の損傷が進んでいる。親不知子不知付近は、山頂直下から続く大崩落地であり、登山コースがこの崩落地を横切っていることから登山者は常に落石の危険性にさらされている。



2. 検討状況

(1) 検討課題

登山者の安全を確保し、かつ植生への影響を軽減させるために、登山道をどのように整備すべきかが検討課題となる。手法として、①廃道、②ルートの付け替え、③修復を続けながら現道を利用、④基盤の床固めを含む大規模な整備、といった選択肢が考えられ、いずれも地元行政機関、観光関係者、山岳関係者に大きな影響が及ぶことから、地質調査の結果など客観的な事実を確認しながら合意形成を図っていくことが検討方法として重要となる。

(2) 現在までの検討状況

平成 15 年度より登山道の崩壊状況について調査を進め、17 年度には地元関係者と関係行政機関が学識経験者とともに意見交換を行う場を 2 回設定した。現在のところでは、登山道は両コースとも存続させ、土のう積工、蛇籠工など小規模な整備と維持管理を主体とした手法で実施しては、とする意見が多く、ルートの付け替えや大規模な工法を取り入れる案には否定的な意見が多い。

(3) 今後のスケジュール

登山道の整備手法だけでなく、現状把握のための調査の継続、安全対策に関する情報発信など関係者が連携しながら対処する事項がいくつかあるため、引き続き平成 18 年度も意見交換の場を設定し、合意形成を図ることとしている。

